

平成21年度 富加町郷土資料館秋季特別展 平成21年10月31日(土)～12月13日(日)

「小舟さんが残したもの ~私たちが語る木村小舟~」



木村小舟は、明治14年に現在の富加町加治田に生まれ、明治から昭和初期の児童文学の発展に貢献した人物です。また、岐阜県にはじめて一般向けの図書館「岐阜通俗図書館」を開設した人としても知られています。

富加町郷土資料館には氏の手書き原稿集102冊や著書が残されています。また、大阪府立国際児童文学館では約120冊の小舟著書を収集・保管しています。

今回は「木村小舟を語る会」の皆さんと協力し、大阪府立国際児童文学館所蔵資料や、当館所蔵の手書き原稿などを展示しながら、小舟の作品や業績を分かりやすく紹介しました。

※木村小舟の著書や資料は、その他に、白百合女子大学児童文化研究センターに小舟のご子息が寄贈した書籍や資料が、また岐阜県図書館に100冊を超える書籍が大切に保管されています。

木村小舟、49歳(昭和4年)
自伝「足跡」より

【幼少～少年時代】

明治14年9月12日、加茂郡加治田村の木村理右衛門の次男として生まれました。本名を定次郎といいます。幼少の頃は、昆虫好きで虫取りや自然観察など、野外を駆け回る活発な子供でした。

当時としては裕福な家庭に生まれ、13歳頃から教師になることを夢見していましたが、肋膜炎を患い、満足な教育を受けることができませんでした。その代わりに小舟は、様々な本を行商人から買ってもらい、夢中で読んでいたそうです。書籍や文学への愛着はこの頃培われたものでしょう。中でも特に彼の気を引いたのが『少年世界』などの、東京博物館が出版する色鮮やかな児童向け雑誌でした。こうした幼少期の体験は、その後の人生や生み出す作品に大きく影響したように思われます。

その後、小舟は自らの生きる道を模索するように、明治29年(1896)からの約2年間は母校加治田尋常小学校の代用教員として勤務し、明治31年(1898)からの約2年間は昆虫研究で名高い名和靖氏に憧れて名和昆虫研究所の助手として働きます。しかし、いずれも一生を賭けるものとは思うことができなかったようです。青年へと成長する彼の心には思春期に抱いた「文学」への強い憧れと情熱が、日に日に大きくなっていきます。

【文学への憧れ、巖谷小波との出会い】

明治の日本は西洋文化が急速に流入し、大きな変貌を遂げますが、出版界では新たに児童文学というジャンルが誕生しました。日本において児童文学の幕を開けたのは、日本のアンデルセンと称される「巖谷小波」です。彼が明治24年(1891)に『少年文学』に掲載した「こがね丸」が、その先駆けと言われています。

小舟は幼くして父を亡くしましたが、その悲しみに暮れていた頃に「こがね丸」が発表されました。郷里加治田でこれを見た小舟少年は「どれだけ心を慰められたことか」と自伝『足跡』に記しています。小舟は自らでも空想を勧かせた童話の執筆を始めます。富加町郷土資料館には小舟が書いた初めての作品「少年理科教場」の草稿が残っています。

代用教員をしている頃、木村小舟は、熱心に自らの作品を投稿し、明治31年(1898)、18歳の時に執筆した「胡蝶船旅行」が東京の出版社「博文館」の主筆だった巖谷小波の目に止まり、木村扶桑の名で『少年世界』に掲載されます。驚きと共に、文学で生計を立てる夢の実現を意識することになったと思われます。

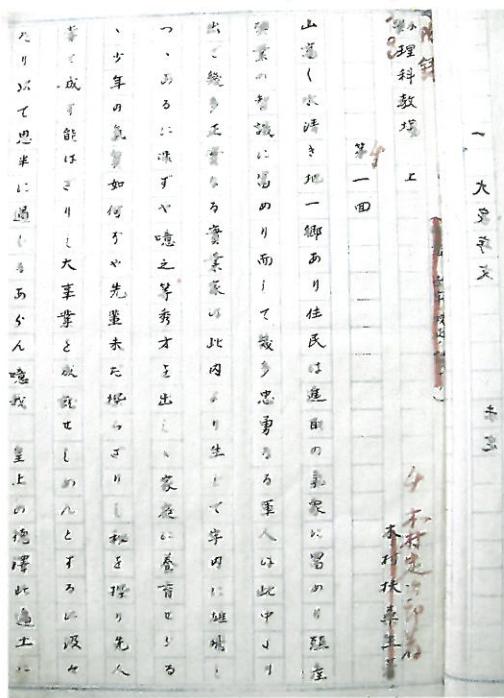


雑誌「少年世界」(富加町郷土資料館所蔵)



名和靖、巖谷小波とともに 名和昆虫記念館の前で

富加町郷土資料館には小舟が書いた初め



小舟が初めて書いた童話
「少年理科教場」の草稿
(富加町郷土資料館所蔵)



豊谷小波との共著(大阪府立国際児童文学館所蔵)

その後、小舟は明治33年(1890)に豊谷に招かれて「博文館」に入社し、少年雑誌の編集や児童書の執筆など精力的に活躍し、豊谷小波らと共に、博文館の黄金期を支えることとなります。

博文館入社後に「木村小舟」と名乗りはじめますが、このペンネームは、恩師豊谷小波と、豊谷の挿図を担当していた武内桂舟の両氏から

一字づつ貰ったものでした。

自らを文学の道へ導いてくれた豊谷に対して、小舟は恩義を忘れることなく、豊谷の晩年には『小波お伽全集』『還暦記念小波先生』など、師の業績の総まとめ的な編纂事業にエネルギーを傾けます。

さらに豊谷小波が亡くなつて2年後には、息子の豊谷栄二とともに東洋伝説を集めた『大語園』全10巻を刊行します。これは小舟が豊谷から託された大事業であり、豊谷の意志を見事に結実させています。※『大語園』は昭和53年に『「説話」大百科事典大語園』(名著普及会)として復刻出版されています。



木村小舟の草稿集
(富加町郷土資料館所蔵)
全部で102冊が残っています。

【ふるさとに図書館を…夢の実現「岐阜通俗図書館」設立まで】

小舟は少年時代に東京には図書館というものがあって、学校へ行けない者も勉強が出来るということを知り、郷里にも図書館ができる夢を見たと自伝「足跡」に記しています。そして15才頃から真剣に将来の図書館設立のために書籍を購入し、東京へ上京した後も、図書を購入し、郷里の兄の家の米倉が書籍でいっぱいになるほどに送り続けました。

大正2年の夏、小舟は帰郷し、友人である岐阜教育新聞の小木曾旭晃氏に図書館設立への協力を仰ぎました。当時、岐阜には学術書が中心で、しかも貸し出しの規定が厳しい県教育会付属の図書館しかありませんでした。小木曾旭晃は「教育新聞」で広く協力を訴えました。

反響は大きく、多くの賛同者や寄付金が集まり、岐阜市議会議員の賛同もあって市から創立費や維持費の支給が決まり、10月には加治田村から荷車15台分の本を運び込み、大正2年11月1日、岐阜市神田町の大和バザーという勧工場(今でいうデパート)の二階に「岐阜通俗図書館」が開館しました。

閲覧や貸し出しは有料で、毎月1,000人以上の利用があり好況でしたが、その収支は切迫していたようです。書籍は東京の小舟が新たに月約100冊ずつ送り、経営を切り盛りする小木曾旭晃はほんの少しの手当で昼夜無休で働いたそうです。図書館へかける情熱だけが支えだったのでしょう。

【岐阜通俗図書館の焼失と、加治田通俗図書館の開設】

岐阜通俗図書館は、大正8年6月11日隣家の油屋の出火によって、建物はもちろん、小舟の蔵書も全焼となってしまいました。その後、再建へ向けて努力しますが、場所の確保等で折り合いがつかず、断念することとなりました。

しかしその後に小舟が郷里の加治田へ帰郷した折に、地元の有志や青年団と話し合いで「加治田通俗図書館」の開設が決まります。以後、小舟は書籍を加治田へと送り続けました。そしてこの図書をもとにして、加治田小学校の一角に「加治田通俗図書館」が開設されました。この一連の経緯は、加治田青年団発行の「鉄の光」に詳しく載っています。



加治田通俗図書館の図書台帳
(松井屋酒造資料館所蔵)

小舟からたくさんの本が送られていたことがわかります。

【文学賞の受賞『少年文学史 明治篇』】



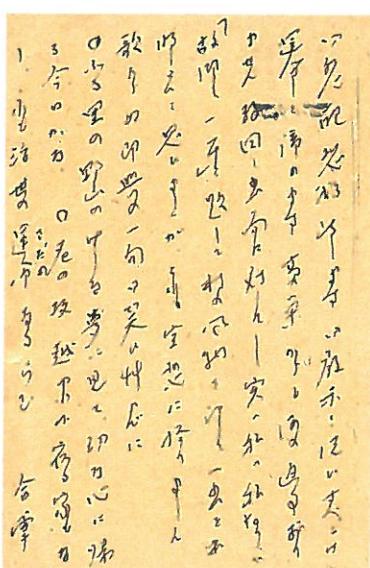
『少年文学史明治篇』(富加町郷土資料館所蔵)



『少年文学史明治篇』出版記念祝勝会の様子 (富加町郷土資料館所蔵)

昭和 17 年には代表作となる『少年文学史 明治篇』上、下、別巻を出版しました。明治の児童文学の経緯と変遷を、豊富な資料と鋭い観察眼で記録した本書は、「日本の近代児童文学研究上の基礎文献として…この分野の最初の、しかも資料的に充実した名著として不朽の価値を持つ」(飯干陽『木村小舟と「少年世界」』平成 4 年)と評されています。本書を執筆した頃、日本は太平洋戦争に突入し、小舟も郷里の加治田へ一時的に帰郷していました。戦争による混乱で資料がなくなってしまうという危惧があったよ

うで、手元に資料もない中で記憶を頼りに書かれた本書は、鮮やかに花開いた近代児童文学の夜明けを描き出しています。本書は、翌昭和 18 年に文部省より文学賞を受賞しています。



【晩年】

『少年文学史 明治篇』を出版し終えた翌年、昭和 19 年に世田谷の自宅で倒れます。その後、療養と疎開のため郷里に近い現在の美濃加茂市加茂野町鷹之巣に移り住み、終戦を迎えます。終戦後は東京に戻り、多少の後遺症を抱えながら執筆を続け、昭和 29 年 4 月 20 日東京中野区の自宅にて亡くなります。74 歳でした。

小舟の晩年 69 歳の時に加治田の知人へ送られた
葉書。自作の句「ふるさとの野山の景色夢に見て、
幼心に帰る今日かな」とある。



小舟の自伝「足跡」(丹羽泰夫氏所蔵)



「木村小舟を語る会」が小舟を紹介するため
に刊行した冊子

古文書クラブによる小舟手書き原稿の活字化と手作り
冊子の制作など、様々なグループがそれぞれの活動を
通して、地域の人々に小舟の業績を語りかけています。

読書サポーターズの会では、子ども達の読書意欲を
高めるための活動をしています。小舟さんの「たくさん
の本を読んで…」という志をうけて、「みんなで読もう
1万冊の本」という目標をたて、読書の町づくりをめざ
しています。

【私たちが語る木村小舟】

平成 17 年に富加町出身の文学者である木村 小舟の業績
を郷土の財産として受け継ごうと、有志の方々で「木
村 小舟を語る会」が設立されました。子ども向けに
編集した冊子「富加町の文学者木村 小舟」全 7 巻
と英語版 1 巻の発行、木村 小舟賞コンクールの開催、
木村 小舟歌碑の建立などを実施し、木村 小舟の業績
を今に伝えています。

またその他にも、とみか朗読の会による小舟作品の
朗読会、コールとみかによる「小舟の歌」の発表や、



手作りの大型絵本を利用した小舟作品の朗読会



木村小舟を語る会が建立した歌碑 (加治田清水寺)



木村小舟賞表彰式

木村小舟のあしあと

明治14年	加茂郡加治田村（現富加町）に生まれる
明治29年（16才）	加治田尋常小学校代用教員となる
明治31年（18才）	代用教員を辞し、岐阜の名和昆虫研究所に助手として入所
明治33年（20才）	巖谷小波の招きにより、東京「博文館」編集局に入社し、雑誌の編集を手がける
大正2年（33才）	岐阜市神田町に『岐阜通俗図書館』を開館する
大正8年（39才）	岐阜通俗図書館が隣家の火事で全焼のちに郷里に『加治田通俗図書館』を開設
大正14年（45才）	小舟の尽力により、加治田清水寺「木造十二面觀世音菩薩坐像」が国宝となる
昭和17年（62才）	疎開のため郷里に帰り『少年文学史 明治篇 上・下・別巻』を執筆
昭和18年（63才）	文部省より文学賞を受賞する
昭和29年（74才）	逝去

【参考文献】

- 飯干陽『木村小舟と「少年世界」』平成4年
浅井康男「書物を愛した木村小舟」昭和63年8月 岐阜新聞
桐花会編『足跡』昭和5年
丹羽平一「木村小舟－明治大正期の少年文学界に活躍－」『岐阜県郷土資料研究協議会会報14号』昭和51年
加治田村青年団『鉄の光』
富加古文書クラブ「木村小舟作品読み解き文集」



古文書クラブの方々が小舟作品を読解した冊子



「小舟さんが残したもの」

木村小舟を語る会 作

- ・夢をもって遂げる強い意志
- ・読書のすばらしさを伝える
- ・図書館をつくり、いつでも誰でも本を読める環境をつくる
- ・自然の不思議さに興味を抱く心
- ・美しい物に興味を抱く心
- ・読書から知識を身につけ努力する心、知識に対する強い好奇心
- ・恩を感じ、お世話になった人への恩返しする心
- ～巖谷小波や名和靖へ著書を通じて恩返しした～
- ・仲間とともに切磋琢磨する心



物

- ・多分野の本（おとぎ話、理科、地理歴史、道徳、美術、仏教、音楽など）
- ・2つの私設図書館（岐阜通俗図書館、加治田通俗図書館）
- ・加治田の清水寺木造十一面觀世音菩薩坐像の国宝指定に尽力
- ・『少年文学史 明治篇』明治の児童文学のなりたちを後生の人々に知らしめた

資料の借用等に関して次の方々に多大なご協力をいただきました。
記して感謝の意を表します。

大阪府立国際児童文学館、粟屋奎二郎、丹羽泰夫、松井屋酒造資料館（敬称略）

「小舟さんが残したもの～私たちが語る木村小舟～」 (展示リーフレット)

禁無断転載

2009(平成21)年11月1日 発行

編 集 木村小舟を語る会

発 行 富加町郷土資料館

〒501-3302 岐阜県加茂郡富加町夕田212

TEL.0574-54-1443

U R L <http://www.town.tomika.gifu.jp/>

印刷製本 西濃印刷株式会社

〒500-8074 岐阜県岐阜市七軒町15

TEL.058-263-4101